

## ケンペル『日本誌』の＜日本＞表象～精神文化を中心に～

伊坂青司

司会：資料にありますように、伊坂先生のご専門はドイツ哲学、ドイツ思想史と文化比較論で、代表的な業績も3つだけ挙げてあります。ケンペルはドイツの正しい発音では「ケンプファー」と言うそうで、この人の書いた本は『日本誌』として日本では知られています。ご存知のように、この本は日本についての貴重な情報源として諸外国で長く使われていました。シーボルトもペリーもこの本を読んで来たとし、20世紀の英国女王エリザベス2世もこれを読んでいたと言われています。伊坂先生にはこの本を中心にご報告頂きますが、思想史がご専門ですので当時の思想状況とも関連付けながらお話頂けると幸いです。

伊坂：伊坂でございます。先程トッリーニ先生が16、17世紀のヨーロッパにおける日本表象のお話をされましたが、私はその後の17世紀末から18世紀のヨーロッパにおける日本のイメージ、表象について話をしたいと思います。

当時の日本は鎖国の時代で、日本の情報は海外にほとんど伝わらない時代であったと思われるんですけども、実はケンペルを通してかなり正確に情報が伝わっていたことが分かっています。鎖国というのは、これまでは否定的に見られてきたんですが、最近は江戸学の研究が進んで、江戸時代の文化が極めて豊かに発展していたことが分かっていますし、出島という狭い窓口を通じてではありますが、そうした日本のことがヨーロッパに情報として伝わっていました。

お手元のレジュメに従って報告していきます。ケンペルはドイツ人ですが、「ケンペル」という表記で一般的に通っています。ただし、ドイツ語

の発音では「ケンプファー」と言いまして、最近では現地の発音に対応する形で「ケンプファー」と表記するケースも出てきています。年代的には1651年誕生、1716年没ということで、日本では江戸時代です。実際、彼が日本に滞在したのは元禄3年から5年で、まさに天下泰平の世の時代でした。

彼が生前に出版した日本に関する書物は『廻国奇観』で、これはラテン語で書かれています。もう一つは通称『日本誌』と言われているもので、彼の死後、最初は英語版として出版され、その後オランダ語、フランス語、ドイツ語に訳され、ヨーロッパで広く読まれたケンペルの書物です。『日本誌』は、18世紀のヨーロッパに日本表象が形成されていく上で、非常に重要なテキストとなりました。先ほどのトッリーニ先生のご発表では、主に天正使節団や宣教師による日本イメージが強かったのですが、ケンペルの場合は博物学の素養がかなりあったものですから、出来るだけ客観的な記述をしようという傾向が強く、その記述によって日本の情報がかなり正確にヨーロッパに伝えられることになったわけです。

ケンペルはドイツのレムゴーという小さな村で生まれたんですが、非常に学問好きで、また冒険好きでした。若い頃からオランダや北ドイツのいくつかの都市を回り、勉強を重ねて行きます。例えばルーベックという港町では哲学や歴史学を学び、また、後にカントが教鞭をとることになるケーニヒスベルク大学では薬学を学びました。薬学は薬草の実用的な研究から始まって、それが植物学にも発展していき、博物学の重要な分野をなすこととなります。日本でも江戸時代に本草学が

元になって、博物学として発展しました。博物学は当時はまだ黎明期でしたが、ケンペルはいち早く博物学を学んでいます。

16世紀から17世紀半ばの時期は、大航海時代でした。大航海時代のヨーロッパは、アフリカ、アメリカ大陸、インドから東アジアの方にまで世界が広がって、未知の世界に非常に関心が向いていた時代です。地球上の鉱物、植物、動物、人間の諸民族の多様性に関心が向いていきました。ヨーロッパが世界の中心であるわけではなく、世界は多様で色んな民族が色んな文化を作っているという認識が広がって、もっと世界のことを知りたいというのが、博物学の関心であったわけです。当時の博物学者は実際に色んな土地を探検していたので、「探検的博物学者」と名称が付けられるほどでした。これは西村三郎さんが『文明のなかの博物学』の中で当時の博物学者の性格を表した表現ですが、ケンペルも冒険的あるいは探検的博物学者の中に分類できると思います。彼自身の言葉に「好奇の病に突き動かされて日本にまで来るようになった」とあるように、彼は博物学的な関心と未知の世界への冒険心によって日本に来ることになったのだと思います。

ケンペルが日本に来た頃のヨーロッパの時代背景は、大航海時代からヨーロッパ列強が台頭してくる17世紀後半の時代。スペインとポルトガルが先陣を切って東方貿易に乗り出し、特にポルトガルは日本の種子島に鉄砲を伝えましたし、スペインは日本を東方貿易の中心にしていました。しかしその後、日本は1636年頃から鎖国に入ります。江戸幕藩体制下でキリスト教禁止令が発せられ、日本人の海外渡航が禁じられ、海外交易からスペインが排除されて、ヨーロッパとの交易はオランダ一国に限定されます。もちろん中国、朝鮮とは長崎の出島を通して貿易関係が続きましたが、出島でヨーロッパとして独占的に貿易をすることができたのは、オランダ東インド会社だけでした。

去年、私は出島跡に行きましたが、当時の姿の復元が進んでいます。かつての出島周辺は現在では埋め立てられ、出島跡は海から少し隔たった街の一角になってしまっているんですね。しかし、

出島の土塁跡を発掘して、残っている当時の図面を使って家屋の3分の1ほどが復元されてきています。大変興味深い復元作業です。

この出島に、ケンペルは1690年（元禄3年）に來日します。ペルシャからシャムを経て日本に來ますが、彼はドイツ人であるにも関わらず、出島のオランダ商館付きの医師として1692年まで2年間滞在します。その間、出島から自由に出ることはできず、ほとんど閉じ込められた状態でしたが、しかし1年に1回だけ、貿易を許可されている感謝を示すための江戸参府に、東インド会社のカピタン（商館長）に随行して行くことができました。長崎の出島から船で瀬戸内海に入り、海路で大坂に向かいます。瀬戸内海では、最近有名になった「鞆の浦」にも彼は寄港しています。私も昨年、鞆の浦に行きましたけれども、ケンペルも見た鞆の浦の風景は非常に美しいものでした。

さて、将軍に謁見するために、彼等は大名行列のようにして、大坂からは陸路で、東海道の宿場町に泊まりながら江戸まで行きます。長崎奉行の面々も一緒に行きますので、当然監視付きですね。恐らく長崎奉行の偉い人達は籠に乗っていたと思います。ケンペルは江戸参府の行列を絵に描いていますが、馬に乗っている15番がカピタンで、カピタンの後に続いている16番がケンペル自身です。

大名行列のような形で行く道中で、彼は色々な観察をし、街道筋で観察したことを日記のように書いています。特に印象深いのは、お伊勢参りに行く人々との出会いです。当時、伊勢神宮は一生に一度はお参りしたい所として、お伊勢参りが非常に大きなブームになっていました。そういう日本の宗教的なことにも彼は非常に関心を持ちますが、同時に日本の自然、地理や風土にも関心を持っています。日本の草花、植物、日本人の様々な生活に触れて、記録をしていくことになります。直接自分で見聞きし体験した事を大切にしましたが、それだけでは限界がありますので、同時に色々な文書類や日本人の通詞（通訳）を通して、日本の文化や宗教についても情報を得ています。ケンペルに付いた通詞は今村源右衛門英生といつて大変有能だったらしく、日本の文化をケンペル

に出来るだけ正確に伝えて、それをケンペルが記録してヨーロッパに伝えることになります。

ケンペルは植物などを精密に描く博物学の訓練を受けていましたから、そういう図像もかなりの数を残しています。博物学的手法で日本の地理、植物、動物、日本人の民族特性を詳細に記述していて、これがヨーロッパにおける日本表象を刷新することになるんですね。それまでは、もっぱら宣教師を通して日本の情報が伝わっていて、日本のことはある程度までは伝わっていましたが、ケンペルの博物学的手法による客観的な記述によって、さらに正確に伝わったのだと思います。

彼は1693年にオランダに戻って、ライデン大学で医学博士号を取ります。その後、故郷ドイツのレムゴーに帰って、東方旅行の記録を整理し、それを出版したのが『廻国奇観』（1712年）というラテン語の書物だったんですね。しかしラテン語ということもあり、また非常に高価だったこともあって、一般の人達が簡単に入手できるものではなかったんです。この書物は東方旅行全体の報告ですが、日本に関する記述もかなり含まれており、彼の死後に出版されることになる『日本誌』の日本についての基本的な見方が書かれています。特に鎖国について、「もっともな理由のある日本の鎖国」というタイトルの記述が含まれています。

この『廻国奇観』における日本に関する記述の特徴ですが、地球主義とも言える極めて広い観点が示されています。引用しますと、「我々人間は皆一つの太陽を仰ぎ、全て一つの地球に住み、同じ空気を呼吸している」とあります。それから、風土の違いによって諸民族は文化的に色々な特性を持つという風土論的な発想が示されています。「地球のいろいろな部分は、川や海や山により、さらにまた全く異なる気候風土（Climat）によって自然の境界線が画され、互いに隔離され、これによってそれぞれの地域に全く才能の異なる民族が住みつくように形造られている」。風土の違いにより民族文化も区別されるということで、これはケンペル独自の視点だと思いますが、ここには、日本の自然・文化・歴史を見る場合の風土論的な視点が既に示されていると言えます。

そしてこの本の最大の特徴ですが、鎖国における日本の現実を極めてよく捉えていて、当時のヨーロッパでは一般に否定的に見られていた鎖国について、肯定的な評価がなされているということです。「小さい世界に閉じ籠もり、隣接諸国と交流せず、世界のどの国からも煩わされずに安穩に生活し、極めて明るい自制と悦楽に明け暮れている」。まさに元禄の天下泰平の世を表しています。そして「その国の位置やその他の条件が、このような隔離を許す状態であり、この国の国民が非常に強力かつ勇敢で、この隔離状態を守り通せるならば、それはたしかに納得できる国家の行き方であろう」とし、鎖国は条件さえ整っていれば国家の一つの在り方であるという評価をしているわけです。

さらに日本の自然と文化、制度についての記述が続きます。地理的な自然特性としては、「極東の島国で、堅牢な天然の要塞で囲まれ、難攻不落の地の利を占めている」。自然風土については、「何処も気候は温和であり、土地は豊饒であるものの平野は少なく、岩礁地帯や山岳が多い」。彼は北海道や東北に行ってはいませんので、厳しい気候の地方というよりも、九州から江戸にかけて彼が実際に見た日本の自然や風土が記述されています。日本人の生活については、「勤勉さと節度ある生活」をおくり、「勤勉な農民は汗水垂らして貧地までも耕し」、「森林の植物を採取し、山菜をも採取してこれを上手に調理して食料に供する方法を心得ている」とあります。毒のある魚を上手く調理して食べているとも記述していますが、これはフグのことでしょう。

国内の産業交易ですが、「全世界を箱庭にしたような国で、国内各州の位置と土地柄の相違によって、各種各様の物資を産出し、各州各島の産物がいずれも日本国全体の間に無相通じて利用されないものはない」。これは各藩の地場産業が非常に振興されていて、各藩の間での交易がありましたので、そういったことが念頭にあるかと思えます。

また、日本国民の性格として、「冷静な勇気を失わず、我が手で自らの命を絶つ事を敢えて辞さない」と言われているのは、いわゆる割腹自殺、

腹切りです。そして「教育の第一義として、死を恐れず勇敢に振る舞う事を教える」と続きます。

日本の制度については、「最高地上神である天照大神の直系の子孫である天皇」と、「俗界の皇帝である将軍」の権力が並列しているとしています。京都には天皇の内裏、江戸には幕府将軍の居城があるということで、教権と政府権力が二重権力として並び立っていたんですが、これはヨーロッパにもあることだったので、特に奇異に映らなかったようです。

日本の刑罰については、「幕府の掟に背いた者は死刑を持って処罰され、情状酌量し減刑する余地が全然無い」と言われています。掟に背いた者には死罪を持って臨むということで、これは幕藩体制の厳しい面としてヨーロッパに強調して紹介され、これによって日本の負のイメージが出来ていくことになるわけです。

鎖国については、もともとはドイツ語の *verschliessen* が「門戸を閉ざす」という意味で使われ、これが後に「鎖国」という訳語で通用することになります。「この国は完全に門戸を閉ざし (*verschlossen*)、常にそして永久に国の門戸を閉ざして、すべての外国人を精選しなければならなかった。このことが、この国の統治形態にも風土にも適っていたということであり、国民の幸福と幕府の安全のためにも等しく必要だったということである」というように記述されています。『廻国奇観』の中の「もっともな理由のある鎖国」という部分が、後にラテン語からドイツ語に訳されて、『日本の歴史と記述』に掲載されることになります。

一般に『日本誌』と言われているケンペルの書物は、実はケンペルの生前には出版されなかったんです。彼は膨大な資料を整理して、原稿の束に“*Heutiges Japan*”というタイトルを付けて、日本に関する書物の出版準備をしていました。しかし彼は出版を果たすことなく、死んでしまいます。死後、その情報を聞きつけたイギリス王立協会会長スローン卿がこの原稿の束を含むケンペルの遺品を買い取り、イギリス王立協会図書館に寄贈しました。スローン卿は、有能な若い研究者にその原稿を英語に翻訳させ、“*History of Japan*”として

出版します。これが『日本誌』として最初の本だったんですね。最初、英訳本として出て、そこからオランダ語訳、フランス語訳、そしてドイツ語訳が出てヨーロッパ全体に広がっていくことになります。

実はこの“*Heutiges Japan*”の手書きの原稿の束を、ケンペルは生前にもう一つ作っていたんです。その原稿が後に発見されて、ドームというドイツの経済学者がその原稿を元にして、ドイツ語版を“*Geschichte und Beschreibung von Japan*” (『日本の歴史と記述』1777~79年) というタイトルで出版します。この中に『廻国奇観』の「もっともな理由のある日本の鎖国」をラテン語からドイツ語訳して付録として入れて、最後にドームの「編者あとがき」が付きます。ドームはこの「あとがき」のなかで、彼は啓蒙主義的な学者だったので、鎖国に対して厳しい評価をしています。この批判的論評が、『日本の歴史と記述』の普及とともに、日本に対するイメージを作っていくことにもなります。

『日本の歴史と記述』の中の日本と日本人についての記述を見ていきたいと思います。日本の地理的特徴として「日本 (*Nipon*) の国は自然の要害によってこぢんまりと諸外国の侵略から守られており、生活必需品は何でも入手でき、外国の力を借りなくても完全に自給自足できる」とあり、完全な自給自足の経済システムが国内で成り立っているという評価をしています。

日本人の特徴として「全体として（とくに日本本島の一般人は）短躯強壯」、つまり背が低く、がっしりしていて強壯である。「肌色は褐色を帯び……目が細く小さい」と言われています。ヨーロッパの人から見ると、目が小さいというのは、日本人の特徴に見えるようですね。ケンペルは日本人に共通するこうした特徴を挙げると共に、日本の地方によっても特徴が違うということも見ているんですね。例えば、肥前と肥後の人では顔立ちが違うという所まで見えています。

日本の宗教については、神道、仏道、儒道、切支丹道という四つの中で、特に記述を大きく割いているのが、神道です。儒道、仏道、切支丹道は外来の宗教であり、神道こそが日本固有の宗教で

あるとして、彼は非常に興味を持ったようです。『古事記』の中にあるイザナギノミコトとイザナミノミコトによる国産みと天照大神らを産む話。ケンペルは「アマテルオオカミ」と呼んでいます。が、この天照大神からの天皇の継承によって日本は父権制度が継承されているとしています。彼は天照大神を男神であり、そこから父権制度が確立していると言っているんですが、最近の研究では天照大神は女神である事が定説となっています。誤解があったのかもしれませんが、当時はこの定説がまだ無かったのかもしれませんが。

また、民衆の伊勢神宮参詣、つまりお伊勢参りについてもケンペルは非常に関心を持っていて、実際に伊勢神宮の絵も描いているんですね。彼は実際に伊勢神宮に行ったことがありませんので、何かの絵を見て彼なりの解釈で描いたと思います。この絵は興味深くて、天照大神の社、つまり内宮の本殿とそれに付属する建築が描かれています。荷物を担いだ飛脚のような人達や、刀を差した武士、町民、神官と一緒に描かれていて、伊勢神宮が閉ざされた神域としてではなく、開かれた所として描かれています。それから、松島の瑞巖寺にある五大堂を絵に描いていますが、彼はその五大堂を神道の社として描いていて、神道の影響の中で理解していたようです。

ケンペルの神道理解は、『古事記』を素材にしています。日本は最初混沌とした状態で、ケンペルの解釈では、その混沌が「気」の力によってだんだん形を成していったとしているんですね。「気」とは、ご存知の通り中国の朱子学概念ですが、彼は朱子学的な理解ではなくて、日本神道を理解するキーワードとして考えています。ここで少し長くなりますが、引用します。「混沌に気(Ki)が加わった。気とは精気、蒸気、霊気のことである。混沌のなかにこの気が通ったことにより、天神七代が出現した。... この気というのは、宇宙の精気(Anima Universi)ないし世界靈魂(Weltgeist)とでも名付くべきもので、死せるものすべてにとって、さまざまに迂回し衝突して濁る水のように不純なままに停滞する純粋な魂(Seelen)も、そのまま普遍的な世界靈魂(Weltgeist)へと向かってゆく。自我存在や個人の人格

も、水が海に混じり合うように、この世界靈魂のうちで止むのである」。ここで言われている Anima Universi というのはラテン語で、新プラトン主義哲学の中でよく使われる言葉で、ケンペルにもそのような哲学的素養があったんだと思います。Anima Universi を Weltgeist という「世界靈魂」とほぼ同じ意味でドイツ語訳しているんですね。個人の自我や人格は、最終的には宇宙に満ちている霊気、靈魂の中に溶け込んでいく、海に交じり合うように宇宙に帰っていくという理解をしています。これは日本民族固有の宗教についての解釈で、個人が神と契約するという考え方のキリスト教とはかなり異質だと思うんですね。

その神道に関心を示しているケンペルの宗教意識はどんなものだったのでしょうか。実はケンペルは少年時代に、伯父が魔女狩に遭い、宗教裁判にかけられて殺されているんですね。これがショックで、ヨーロッパのキリスト教に対する懐疑が、小さい頃から芽生えたんじゃないか。彼の家もキリスト教徒ですから、やはり彼の中にもキリスト教のベースはあります。しかし彼の中には宗教的寛容の精神があって、キリスト教だけが宗教ではない、アジアにはアジア、日本には日本の宗教があってよいという宗教の多様性、民族的な固有性を認めている。

これは私の仮説ですがけれども、彼が Weltgeist という言葉を使っていたということは、当時のルネッサンス時代の新プラトン主義の影響があるのではないかと。新プラトン主義とは、当時のイタリアで広がった思想で、宇宙靈魂が流出して世界の中に広がるという流出説を考え方の中心としていて、例えばイタリア・ルネッサンスのフィチーノは、「宇宙精気」(スピリトゥス・ムンディ)が地上に流出して広がり、様々な現象を起こしているという見方をしています。ブルーノもキリスト教の異端者とされてヨーロッパ各地を転々としていたのですが、彼の考え方も「宇宙靈魂」(アニマ・ムンディ)がその根源的な生命力によって地上に流出して広がっていくとしています。こういうヨーロッパの新しい宗教的な流れを、ケンペルがどこで受容したかということはまだ立証できていませんが、どこかで彼がそうした流れに触れたと

いうことは十分考えられます。

さて、ケンペルの日本情報はヨーロッパでどのような日本表象を作り、どういう影響を及ぼしたのでしょうか。18世紀半ばのヨーロッパというのは、それまでの30年戦争などの荒廃から回復して、また近代的な科学技術がヨーロッパの学問や生活の中にだんだんと普及し始めていました。こうしてヨーロッパに理性と自由の原理を掲げる啓蒙主義の流れが作られていきます。そしてその頃の思想家が、啓蒙主義的な発想でもって日本をヨーロッパに紹介するわけです。

例えばモンテスキューの『法の精神』（1748年）には、日本の刑罰についての記述が出てきます。日本の皇帝（将軍）の専制主義によって死刑が簡単に行われる、というように紹介しているんですね。モンテスキューは、ケンペルの書物でその他の日本情報も読んでいるはずですが、とにかく日本の刑罰は自由主義に反するという書き方になっています。あるいはデイドロ等の『百科全書』も、東洋の後進性の中に日本を位置付けていて、近代ヨーロッパの理性が全ての基準になっていました。

そのような時代の流れの中で、ドームも『日本の歴史と記述』の「編者あとがき」の中で、啓蒙主義的な視点でもって「近代化の遅れた日本」というように批判しています。例えば「日本の法律」は、「非人間的な残酷さで成文化」されているというように、まさにモンテスキューの記述と重なっています。また日本は鎖国によって外国と断絶しているから日本人は不幸で、「日本人は幸福でない」から「簡単に死を観念して命を断つ」のであり、日本人が特に勇気があって自らの命を断つわけではないというわけです。アジアに関して自由が欠如しているということで、「アジアの歴史からはあまり大きなものは期待できない」とされています。こうして「鎖国は一大不幸である。開国することこそが日本人にとっても、外国人にとっても緊要なことである」というように結論づけています。

ドーム編の『日本の歴史と記述』には、ケンペルの客観的な日本記述と同時に、こうした鎖国批判の記述によって、啓蒙主義的な風潮の中で前近

代的で時代に遅れた日本という表象が作られることになります。そこには、ヨーロッパの当時の新興国、つまりオランダに代わって覇権を取ろうとしていたイギリスやフランス、そしてドイツ等の勢力が台頭してくるという歴史的背景があります。日本との交易をオランダだけに独り占めさせるなどということから、日本に対する開国要求が強くなってくるわけです。

一方でこれとは別に、ケンペルを評価しようとする流れも出てきます。その代表は、ドイツの哲学者でケーニヒスベルク大学で教鞭をとっていたカントです。彼はこの大学で1757年から1797年までの実に40年間にわたり「自然地理学」の講義をしています。カントと言えば『純粹理性批判』が代表的な著作とされていますが、彼自身は「自然地理学」講義を一番気に入っていたらしく、世界の博物学的な情報を織り込み、世界の諸民族について様々に論じる講義は、学生だけではなく市民にも非常に人気があり、講義室は満員だったようです。その講義の中でカントは、日本については主にケンペルの『日本誌』を使って話をしていました。当時は日本についての情報は限られてはいましたが、ケーニヒスベルクは港町で世界の情報が集まり、ヨーロッパ有数の学術都市でした。カントも日本についての博物学的な情報を集めていて、ケンペルの記述も大いに利用しています。カントの『永久平和のために』（1795年）という書物では、ケンペルの鎖国論に依拠して、国家が独立し自律的に発展するためには日本の鎖国もまた「賢明な措置」であると評価し、当時のヨーロッパの覇権主義に対しては批判的な立場をとっています。このカントの影響を受けたフィヒテも、『封鎖商業国家論』（1804年）を出版して、この中で条件付きながら国家の封鎖状態を承認しています。このように当時のドイツの哲学者の中でも、ケンペルの鎖国論に対する評価が高くて、日本の鎖国を容認する議論がヨーロッパの中にも一方ではあったんです。

鎖国を巡る議論は現在でも進行中ですが、鎖国下の日本は国内で経済や文化が自律的に発展していたことが分かってきています。また国際交流という点で見ても、出島という限られた窓

口ではありながら、オランダを通してヨーロッパの学問が蘭学という形で日本の中に取り込まれていました。逆に日本の芸術作品、特に陶器や漆器などが日本からヨーロッパに輸出されて、ヨーロッパ人に非常に好まれました。こういった日本から輸出された物が、ジャポニズムの流行する背景になっているだろうと思うんですね。

ケンペルは日本文化の基礎に日本の風土を見ているのですが、ヨーロッパの風土論ではヘルダーの『人類歴史哲学考』が源流として考えられてきました。ただヘルダーの前にもカントの「自然地理学」が自然風土を考察していますし、さらに遡れば、ケンペルも「風土」という概念を使いますので、やはりケンペルも風土論の源流に位置づけられると思います。日本では和辻哲郎の『風土』が有名で、和辻は『風土』の中でヘルダーの風土論に注目しています。近年この和辻の風土論が再評価されており、「風土」という概念は文化論を展開するうえでも、重要な概念の1つとなっています。

現在、アメリカを中心としたグローバリゼーションが問い直されつつあり、逆に地域文化の復権が進みつつあります。食文化についても、いつまでもマクドナルドじゃないだろうと、日本の各地方の食が見直されつつあります。こういう動向を見ても、ケンペルには時代を先取りする目があつたんじゃないかなと思います。以上です。

司会：ありがとうございました。時間が押しておりますので、ご質問は午後3時からのパネルディスカッションの際に受けたいと思います。今から昼休みに入りまして1時から再開の予定です。ご清聴ありがとうございました。